
ISに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

MS-07SP グフ万能使用格闘特化型

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

【Nコード】

N1034Y

【作者名】

MS-07SP グフ万能使用格闘特化型

【あらすじ】

アークの衝突を回避した二匹の針鼠は、別世界で何を見て何を信じるのだろうか

相変わらず作者は文章が下手です。
何があっても大丈夫な心の広いひとのみお願いします。

プロローグ

「「カオスコントロール」」

僕とソニックは、間違いなくプロトタイプもろともアークを飛ばしたはずだった。

だが気がつくと何処かに倒れていた。

「ここはどこだ」

知らない天井もといい違う世界だと直感的に感じとった。

「目が覚めたようだな」

突如としてかけられた声に思わず臨戦態勢を取る

後で考えてみれば無駄な誤解を与えるだけだったと思う。

「こちらに敵対の意思はない」

確かに向こうは、何も武器を構えていなかった。

とりあえずある程度の警戒は、解かず臨戦態勢を解除する。

最もその気になれば目の前のたかが女一人ぐらい軽く倒せると思うが。

「流石にそう簡単に気を緩めることは、出来んだろう。」

それはさておき本題に入ろう

お前の名前は、何だ。そしてどこからここにはいったんだ。

それとこれは何だ。

そしてお前は、何者だ。

そしてこいつは誰だ。貴様と姿が似ているが………」

「それは……
僕の名前は、シャドウ シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ。
二つ目の質問だがわからない
三つ目の質問だがそれはカオスエメラルドだ。
四つ目僕は、作られた究極生命体だ。そして彼はソニック ソニック・ザ・ヘッジホッグ『冒険好きのただの針鼠』だそうだ。」

「お前たちには男のはずなのに説明したISの適性があつた。しかも計ることができないほどだ。そこでこの訓練機に触れてほしい。」
「了解した。」

シャドウたちは、共に打鉄とラファールに触れた。

「なっ！」

驚くのも無理がない彼等が触れたISは、コアネットワークから完全に遮断され新たなIS「アロндаイト」と「カリバーン」になった。

どうやらこのIS学園なる場所に入学することになるらしい。
入試の模擬戦をしなければならない。最も生身でも勝てるとは、思

うが。

相手のISとやら大きい 確かに大きいが奴？プロトタイプ？に比べると小さい。

ご丁寧にエメラルドは、七つ全て揃っている。
軽く遊んでやるとするか。

「初め」

その一言が言われたと思うと相手側のISは、もう吹き飛んで解除されていた。

かかった時間0'001

「下らんガラクタどもめ」

はっきり言って弱すぎる

あれでは、E-10002にも勝てんだろう。
人工カオスなど持った他だ。

私織斑千冬は、驚きを隠せなかった。

何故なら世界最強のISを訓練機とはいえ生身で

しかも一瞬で倒したのだ

私は、自分の中に恐怖と闘争心が芽生え訓練機を借りることにした。

つぎの相手は、どうも気配が先程の相手と違う。
少しは、力を使うとするか。

「カオススピア」

小さく鋭い針のようなものが遅いかかる

結果は、シャドウの完封だった。

別の部屋のソニックも同じだったそう。

私は、自分自信化け物だと思っているだがその上を行くものが存在するとは思っていなかった。

シャドウ・ザ・ヘッジホッグか

いつか一矢を報いるために私は、まだまだ訓練を重ねる必要があるそう。

プロローグ（後書き）

ソニックとシャドウの容姿は、基本的に針ネズミからかわっていません。

入学と伝説の始まり

It doesn't matter (Silverを脳内で流して下さい。)

俺の名前はソニック ソニック・ザ・ヘッジホッグだ
前回突如として転移してしまった世界にはISとかいうマルチフォ
ームスーツがある世界だった
しかもカオスエメラルドが全て2つになっていて合計十四個になっ
たんだ。

なんかそのうちエッグマンの野郎とかもきそうだが
だけど頼むからエミーには来てほしくないな

とソニアドのあらすじ紹介ぼくしてみたby作者

という訳で僕達は、今1ー1の教室の前にいる針鼠の姿だったんだ
がどうやら人間の姿にもなれるみたいだ
なんだかわかんが便利だな。最もスピン系はすこし使えなくなる
ものもあるようだがこの世界ではそんなものなくてもそこそこ戦え
るからたいして不便ではない
ソニックはどうか知らないが

時間がたちすぎに見えるが実はまだこの世界に来て2日（実質1日）
しかたっていない

今は、織斑教諭に呼ばれるまで教室で待機しとくように言われたの
でソニックと少し技のだしあいをして暇を潰している
因みに同じクラスなのはいろいろ調整が違うクラスにすると大変だ
からだそうだ。

あと僕たちは双子ということにしている。人間の時の姿が瓜二つで
髪の色が違うだけだったからだ。

「ソニック、シャドウ入ってこい」

僕たちは呼ばれてとりあえず教室の中に入った。ほぼ女子校という
ことを忘れて

「きゃあああ」

「男が二人も」

「しかもイケメンで見た目クール系」

黄色い悲鳴が聞こえる

大丈夫なのかこの学校

仮にもエリート校なのだろう

「シャドウお前から自己紹介してくれ」

目でうなずき

一息おいて自己紹介をかるくする

「僕の名前はシャドウ シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ。特技になるかわかんが重火器の扱いと整備ならある程度できる。」

さすがにこれを言えば黙ると思ったが甘かったようだ。

また黄色い悲鳴が聞こえる

あとはソニックに任せる

「俺はソニック ソニック・ザ・ヘッジホッグだ。特技は走ること
で好きな食べ物はチリドックだ」

また黄色い悲鳴か。頭が痛い。

あれからしばらくしてもう一人の男である織斑一夏に話しかけよう
としたら誰かにつれていかれ金髪ロールの明らかにお嬢様というオ

ーラを出している多分エリートであろう人物が話しかけてきた。

「ちよつとよろしくて」

「よろしくないな」

「まあなんですかそのお返事はこの私に話しかけてあげたのですからそれだけでもそれ相応の態度があるのではなくて」

「悪いが僕たちは君のことを知らないというより昨日急きよ入学することになったからな」

「この私を知らない」

入学首席にしてイギリスの代表候補生であるこの私セシリア・オルコットを

というか昨日ってなんですよ」

「代表じゃなくて代表候補なんだな」

「読んでじのとおりであれば世界中の女性全員になるがわざわざいうくらいならエリートとやらだろう」

「そうエリートなのですわ」

「で そのエリートさんがいったいなんのようで」

「貴方私の質問を無視するとはいい度胸じや『もうチャイムがなる時間なので先に失礼させていただきます』ちよつとまだ話は終わってn『さつさと席に着かんか馬鹿者!』」

凄く痛いような音が聞こえた。

あれからしばらくしてクラス代表を決めることになった。

「私は織斑君を推薦します」

「じゃあ私はシャドウ君を」

「なら私はソニック君を推薦します」

「ちよっと待った！俺は」

向こうで一夏が織斑教諭に出席簿で叩かれている。痛そうだ。

「ちよっと待ってください納得がいきませんわ！

大体……」

向こうでオルコット嬢が何かを言っているらしい。

「そのあなたたちも聞いていらっしゃるの？」

「悪いが僕達は、何処の国家にも属していないのでな

んと言われようとも別に関係無い」

「あなたたちは黄色い猿より針鼠と言った方がいいのかしら」

「否定はしない

間違っていないからな」

「そこ勝手に話を進めるな」

出席簿で叩かれそうになるのを直前でカオスコントロールを使い回避する

「チッ！」

今舌打ちしたな

「決闘ですわあなたたち」

「了解した」

「いぜ受けてやる」

「面白いやってやろうじゃん」

「でハンデはどうすんだ？」

……（以下原作のやり取りが続く）

「であなたたちはハンデをどうします。」

「オルコットそこまでにしておけ

ハンデはむしろお前に必要だ。」

「それは侮辱『お前はどれだけの時間で教官を倒した』

「3分46秒ですわ」

「そうか

安心しろソニックは三人相手に五秒

シャドウは私相手に三秒もかけずに勝っている
しかもIS対生身で」

「そんなありえませんか！」

「折角だ

二人の試合の様子を見せてやる」

皆はビデオ（といっても一分もかかっていないが）を見たあと皆は
驚愕の表情を浮かべオルコット嬢は絶対に喧嘩を売ってはいけない
相手に喧嘩を売ったことに顔色をどんどん青くするのであった

アンケート

いきなりですがアンケートを実施します。

アンケートの内容は、ソニックキャラの内誰をISの世界に送るかというのとソニックキャラの記憶を本来あるはずの内記憶を異世界に來たことでその記憶を手に入れるかどうかです。

ちなみに現在登場を予定しているのはギゾイドとE-121とE-123とエッグマン（ヒーローサイド）とテイルスとエッグマンの雑魚メカを出すつもりです。ただヒーローサイドかダークサイドかは決めていませんのでどちらのサイドかも明記してくださると助かります。

それと初めのアンケートはソニックとシャドウ以外一切出さない方がいいという場合はそのように明記してください。

期限は二十日の日曜日です。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034y/>

ISに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

2011年11月16日03時09分発行